

科学・技術の進歩も基本は国語力

近ごろ、水平思考という言葉で有名なケンブリッジ大学の教授デボノ博士が、「イギリスではせいぜい数千部も売れば上出来と思われる技術書が、日本では十万部以上も売れる。この読書エネルギーは、やがて日本を世界一にするだろう」と言っています。

たしかに、明治時代の発展も、第二次大戦後の興隆も、共にこのエネルギーによるものだといえることができます。

日本人くらい書物や新聞雑誌をよく読む人種はありますまい。混み合う通勤電車の中でも、多くの人が何かを読んでいます。たとえそれがスポーツ新聞であっても、とにかく、階層の区別なく活字を読んでいる。これは諸外国には見られない日本人の日常の姿勢の一つと言えます。

この特異性が、日本人の知識を向上させ、技術を向上させ、短時日の間に先進国の文明に追いつき、追い越させた、最大の理由だと言えます。

以前、朝日新聞に、「科学技術教育と国語教育の重要性」という題の社説が載ったことがあります。それは次のような要旨のものでした。

近ごろ、科学技術教育の必要性が叫ばれているが、それについても、その根底にある“国語”の教育の重要性を忘れてはならない。極度に正確な表現と理解とを要求する科学を学ぶには、細かい知識や技術そのものよりも、学問研究のための基礎としての国語をしっかりと身につけることが肝要である。

科学を修めるためには、まず、先人の著述や記録を正確に理解する“読解力”を必要とする。

次に自ら観察し、実験した所を、論理的に精密に記録する“表現力”を欠くことができない。つまり、科学や技術に限らず、あらゆる学問が進歩する根底には、それぞれの国の“国語”の力というものがあるのだ。

この考え方は大切です。良い花を咲かせたい人は、花そのものには手をかけないで、まず土に肥料を施し、水を与えることに専念します。科学教育と言い、技術教育と言うのも、いわば、豊かな土壌である“国語教育”の上に咲く花です。科学教育だ、理科教育だと騒ぐまえに、まず国語教育をしっかりとやらなければなりません。